

[特集2] 2014年度夏の学校「科学史・医学史とアーカイブズ」

医学部図書館における医学史資料の保存と活用 ——「近代医学の黎明デジタルアーカイブ」と展示会

蒲生英博*

はじめに

名古屋大学医学部史料室は、医学部図書館4階にあり、名古屋大学医学部の歴史は元より、広く医学史、医療史に関連する古医書、文書、歴史的医療器具、写真等を収集、保存、展示している。図書館内にあるが、所蔵品からみると、名古屋大学医学部の「公文書館」的な機能と「医学博物館」的な機能もあわせ持っている。

1971年に完成した医学部図書館にはすでに「資料室」があったが、今日の医学部史料室の姿となったのは、1986年から1998年にかけて医学部同窓会による卒業30周年記念事業として整備されてからである。その後、漸次整備されてはきたが、職員が常駐していないため、通常は施錠していて、史料の公開と活用という点からは改善が必要であった。

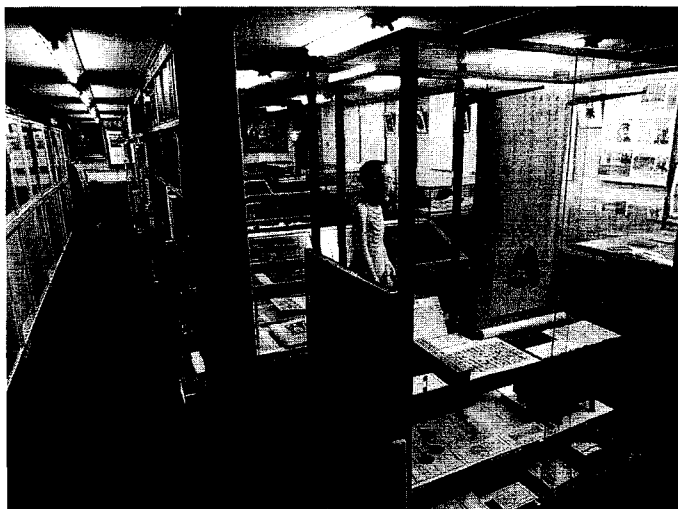


図1 名古屋大学医学部史料室

* 〒466-8550 名古屋市昭和区鶴舞町65 名古屋大学附属図書館医学部分館
E-mail: gamoh@nul.nagoya-u.ac.jp

1. 医学史料の公開をめざして

従来の医学部史料室の利用者は、すでにその存在を知っている医学、医学史、郷土史などの研究者が主であった。史料をより良く、広く活用してもらうために、史料のデジタルアーカイブ化を行ない、医学部史料室とその所蔵品の存在を広く知らせること、次に、デジタルアーカイブに関心を持った人に、現物に触れる機会を提供する、という手順を考えた。また、1)若い世代が医学に関心を持つ契機とすることと、2)生涯学習の教材としても貢献することを当面の目標とした。しかし、医学部史料室のための独自の予算は無く、担当者は一人しかいない。

そこで、2010年5月ごろに資金獲得も含めた大まかな3年計画を立てた。3年計画の1年目はデジタルアーカイブの仕様策定と、外部資金獲得のためのプロトタイプの作成と公開、外部資金への申請である。2年目はデジタルアーカイブを正式公開し、3年目は展示会開催によるデジタルアーカイブ登録史料そのものを公開することを計画した。助成金の申請に際しては、医学部図書館長の決裁を受ける必要がある。採択された場合、助成金は機関管理となり、実績報告書等も医学部図書館長の決裁を受ける。

医学部史料室の主な所蔵品は、以下の三つに分けられる。第一に、名古屋大学医学部の歴史に関するもので、お雇い外国人ヨングハンス (T. H. Junghans) とローレツ (Albrecht von Roretz) 関連史料、明治初年愛知県公立病院外科手術の図、愛知医学校長後藤新平と同時代の医学者 (司馬凌海、奈良坂源一郎など) の関連史料、愛知県公立病院及医学校之平面図、などが含まれる。第二に、医学史、医療史に関するもので、経絡人形、薬籠、種痘用具一式、三村玄澄関連史料、桐原式軟性胃鏡、などが含まれる。第三は古医書で、ヴェサリウス (Andreas Vesalius) 『ファブリカ梗概』の注釈本、杉田玄白『解体新書』、『北越従軍銃創図録』、などが含まれる。

2. 近代医学の黎明デジタルアーカイブ

「近代医学の黎明デジタルアーカイブ」(<http://www.med.nagoya-u.ac.jp/medlib/history/>)⁽¹⁾は、2010年10月にプロトタイプを公開後、2011年12月から正式に公開している。デジタルアーカイブでは、医学部史料室の所蔵品を対象とするため、古医書だけでなく、歴史的医療器具、写真等の非図書資料もデジタル化することとした。つまり、近代医学の黎明期に誕生した名古屋大学医学部 (1871年創基) の歴史を、東海地方、あるいは医学史、医療史の中で位置付ける、という視点である。これは、従来、大学図書館等が公開してきた古医書データベースと大きく異なる点である。

デジタルアーカイブ内では、時系列による史料一覧、西暦検索 (~1750年~1800年~1850年~1900年~)、史料名検索 (あ行~わ行)、形態検索 (文書、図書、絵画・掛軸、図・絵葉書、写真、医療器具、講義録・ノート、その他) により、史料のメタデータ、関連画像、関連リンクが利用できる。関連画像はデジタルアーカイブ内の関連する他の史料の画像、関連リンクは



図2 近代医学の黎明デジタルアーカイブ

大学内の類縁機関（附属図書館、大学文書資料室、博物館）の関連情報へのリンクである。さらに、文書、図書などは、デジタルブックとして全文を読むことができる。

デジタルアーカイブ内はFlashを使用しているため、GoogleなどのWWW検索エンジンでも史料のメタデータが検索でき、画像の利用が容易にできるように、htmlファイルも持っている。

3. 企画展示会

ミニ展示会と名づけて、2012年9月を第1回として、2014年8月時点で第7回目を開催している。これまでのテーマは、次のとおりである。

- 第1回 歴史の時間——名古屋大学医学部・附属病院の歴史を遡って
- 第2回 ノートの中の青春——講義ノートが伝える医学生の歩み
- 第3回 不思議！？解剖図——ヴェサリウスから奈良坂源一郎まで
- 第4回 珍品・逸品・新収品——医学部史料室の最近の収蔵品から
- 第5回 愛知医学学校長 後藤新平——『大風呂敷』と呼ばれた男の名古屋時代
- 第6回 戦争と大学——1931～1945 官立名古屋医科大学・名古屋帝国大学
- 第7回 千年の医書——平安時代から江戸時代までの古医書の世界

展示品はすべて医学部史料室の所蔵品である。展示品のキャプションとデジタルアーカイブ

のメタデータは共通の記述としている。展示会の開催期間は各回3か月半程度で、会場は医学部図書館の2階入口ホールの入館ゲートの前である。広報は、大学の広報誌のほか、報道機関に対しても行っているため、新聞掲載、テレビでの放映などにより、市民の来館も多い。展示ケース2台は、田嶋記念大学図書館振興財団の平成23年度助成金により購入した。

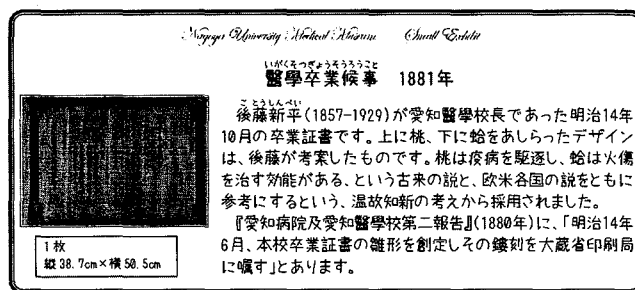


図3 展示品のキャプションの例

4. 効果と課題

デジタルアーカイブの公開と展示会開催による効果としては、次のことがあげられる。

- ・当初の目標どおり、老若男女を問わず、医学部史料室とその所蔵品の利用者が増え、学習、研究などに貢献できている。
- ・医学部史料室の所蔵品の調査が進んだ。
- ・医学部史料室の所蔵品に関連するレファレンスが増えたが、調査の進展により回答が容易になった。
- ・資料の寄贈が増え、発掘、収集の契機となっている。主な寄贈者は、卒業生及びその家族、展示会を観覧した市民などである。
- ・学内外の類縁機関（博物館、文書館、図書館など）との関係が深まった。
- ・医学、医学史、郷土史などの研究者から、有益な意見を得る機会が増えた。

一方、課題としては、助成金が無いとデジタルアーカイブの増強が難しいことであるが、デジタルアーカイブ公開のための事前準備には相当の時間を要するため、助成金無しの間は、調査研究の時間に充てることができる。なお、展示会は助成金が無くとも開催できる。

また、名古屋大学では、通常2～3年で職員の異動があるため、持続可能な事業とするための工夫が必要となる。この事業の担当者は1名だけであることから、全体にわたり蓄積したノウハウを、いかに効率的に継承していくかが問題となる。ただ、担当者が替われば新たな視点から事業を展開していけるという期待はできる。

5. 今後の展望

デジタルアーカイブは、海外 (Hanover, Seoul, Tainan, Masan, Brea, Taipei, Shenyang, Shanghai, Heidelberg, Parisほか) からの利用や、登録史料に関連したレファレンスがある。また、学内の外国人研究者や留学生からの要望もあるため、現在、英語化を進めている。

企画展示会は、学内外の類縁機関との共同開催による展示会も模索している。すでに、好評だった展示会「戦争と大学」は、大学文書資料室との共催により、資料室が所蔵する史料やパネルも加えて、大学本部がある東山キャンパスでも開催されることになった。展示品のキャプションをまとめて、医学部史料室の所蔵品図録として発行することも計画している。

注

- (1) 「近代医学の黎明 デジタルアーカイブ」は、次の助成を受けている (本稿執筆時点)。平成23年度笹川科学研究助成 研究番号 23-809、平成23年度科学研究費補助金 奨励研究 課題番号 23910026、平成25年度科学研究費補助金 研究成果公開促進費 (データベース) 課題番号 258060、平成26年度科学研究費補助金 研究成果公開促進費 (データベース) 課題番号 268051。

参考文献

- 蒲生英博「近代医学の黎明 デジタルアーカイブ——医学部史料室へのご招待」『館燈』182 (2012) : 1-4.
<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/koho/kanto/kanto182.pdf> (2014年8月1日閲覧)
- 蒲生英博「『近代医学の黎明デジタルアーカイブ』と展示会による史料の活かし方」『第31回医学情報サービス研究大会抄録集』2014, 38.
http://mis.umin.jp/31/program/pdf/N-14_蒲生_mis31.pdf (2014年8月1日閲覧)